

真宗生活入門講座Ⅳ

法事をつとめる

池田勇諦

法事をつとめる

目次

法要に会う	1
生者と死者	2
生者→死者(自力回向)	3
死者→生者(他力回向)	4
真を宗とする	7
祖先崇拜教	10
遺産を崇拜	12
聞くということ	17

本書は昭和五十九年六月二十六日、愛知県蒲郡市の専覚寺で営まれた専覚寺二十三世・徳専院三十七回忌およびその三女、浄弦院二十七回忌法要の際の池田勇諦先生の法話である。このたび真宗生活入門講座Ⅳとして発刊することを快諾くださった池田先生ならびに楠親之任職に心からお礼申し上げます。

東本願寺出版部

祖先崇拜は迷信	20
息子さんをなくした奥さん	23
「弔う」ということ	28
本当の問題がみつかる	30
親鸞聖人の祖先観	32
諸 仏	34
法事をつとめる	38
「安らかにお眠りください」とは	39
真実に目覚めよ	41
陀 羅 (阿 呆)	45
真と偽の際	49
底が抜ける	52

法要に会う

今日のご当院のご先住の三十七回忌と、ご令妹の二十七回忌の法要をおつとめになりました。皆さま方とこうして一緒に聴聞ちようもんをさせていただく機会を得ましたことを、たいへんありがたく思います。しばらくの間です。十分なことも申し上げられませんが、せっかくこうしたご法要が営まれましたことについて、ひとこと皆さまと学ばせていただければと願うわけです。

私、皆さま方におたずねしたいのですが、このような年回法要ということ、それぞれ皆さん方のお家においてもおつとめになっておられるわけですが、しかしこうした年回法要をつとめるといふことの意味、そ

れに会わせていただくという意味を、皆さんはどんなふうに思っておられるのかなと、それを一つお聞きしたい気持ちにかられるのです。

生者と死者

この問題は端的にいうと「生者と死者」という関係の問題になるわけですが、〈生者〉といえ、言うまでもなくこうして生きながらえさせていただいている私たち一人一人であります。〈死者〉といえ、私に先立つて自らの人生を完結してお浄土へ還かえっていかれた、言葉どおり亡くなられた方ということです。この生者と死者の関係を皆さん方は、どんなふうに受けとめておられるかという問題なのであります。このことを私たちがご縁をいただいている親鸞しんらんしょうにん聖人におたずねするとき、どのよう

にお示しになっておられるのか、そのことをひとこと申し上げたいというのがお話のねらいであります。

生者——↓死者（自力回向）

生者から死者へという方向。つまり生き残っている私たちが、すでに亡くなった方に対して何をなすべきであるか、という生者——↓死者の方向を、親鸞聖人は「自力回向じりきえう」とおっしゃったわけです。こういう固い言葉を出しますと、わかる話がわかりにくくなるかもしれません。が、大事な言葉ですから申し上げるわけです。

つまり、それはどういうことかといえますと、生き残っている私たちが、すでに生を完結していかれた亡くなった方に対して、何かしてあげ

なければならぬという考え方ほど傲慢な姿はない。亡くなった人を冒瀆するも、はなはだしいことではないか。亡くなった方の霊魂とやらを想定して、それに対して、何か呪術的なことを加えることによって、お慰めしたり、また霊を安らかに鎮めてみたり、そういうことを考えることは、まったく死者の心を踏みにじる、生者の無明そのものの姿でないかと、言いきっておられるわけがあります。

死者 → 生者（他力回向）

親鸞聖人が私たちにお示しになっていることは、実はその逆なんです。死者 → 生者の方向です。つまり生き残っている私たちがすでに亡くなった方から、何を聞かねばならないかという、その一点を明らかに

していく方向です。それを「自力回向」に対して「他力回向」と教えてくださっています。

〈回向〉という言葉は今ここに出していますが、真宗でこの回向という言葉がいかに重要な言葉であるかということは、いまさら言うまでもないことですが、他のご宗旨、他の教えにおいては、この回向という言葉が、いわゆる「追善回向」というような言葉づかいで用いられているわけです。おそらく皆さん方も、ひょっとするとお使いになっているかもしれません。追善回向というのは、まさに今いきました生者から死者への方向になるわけです。それでなく、他力回向ということはその逆で、亡くなった方から今日の私が何を学ばせていただくかなくてはならないかという方向なんです。

これは浄土真宗じょうどしんしゅうという一つの宗旨しゅうしにおいて、そういう特別な考え方を
するのだというふうに皆さん方が受けとめられると、とんでもない誤解
になってしまいます。私どもがご縁をいただいているこのご宗旨が浄土
真宗、また「真宗」と呼んでゐるわけですが、確かに真宗という場合、
社会的な現象という面からいえば、一つの宗旨、もつとはっきり言えば
一つの宗派という形をとっているということは動かないところです。

世の中には、たくさんのお教えがあります。その中に仏教がある。ひと
くちに仏教といっても八家九宗で、いろいろなご宗旨があります。その
中の一つに真宗というご宗旨があつて、たまたま私たちはそこにご縁を
いただき所属しているのです、そこのお話を聞くんだと。そういうふうに
一般には受け取られてゐるわけです。けれども今いいますように、確か

にこの世の中に行われてゐる現象の面からいえば、一つの宗派という性
格まねがは免れないと思つてあります。

真を宗とする

ところが、一つの宗派という形で存在する真宗教団が明らかにしたい
と願つてゐるもの、つまり真宗という一つの宗派とおして、私たちが
学ばせていただくこうとしてゐることは、決して一つの宗派の話というよ
うなことではない、ということをご了解ねがいたいわけです。その意味
で私はこの「真宗」という二文字をどういふふうに取りかかるといふこ
とを日頃思うのですが、まずこの二文字を見ますと、私たちは「真しんの宗しゅう」
まことの宗と読みたいといふか、読むわけです。ところが、この真の宗